

Title	アイスランド膝栗毛(フタル布斯)
Author(s)	
Citation	地球 (1924), 2(1): 207-211
Issue Date	1924-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/182699
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

アイスランド 膝栗毛

(フサルプス)

アイスランドのゲイサーに就いては學者の研究した報告もあるが、膝栗毛旅行の面白いのは英國チャーレス・フサルプスの紀行文である。此人は海軍佐官でペルリの日本に來た後間もない一八五九年の夏出掛けたもので、此に掲げた圖は其の表紙に挿んだもので圖の下にある句を本文で辿つて見ると左の如くなつてゐる。(如舟)

乗馬もう一時間の後には山麓から足元のゆらく沮洳地を横ぎつてゲイサー島へ導く泥炭地と熔岩堤を過ぎつゝあつた。其の東側を流れる流を渡り小山の南側の肩にある突起へ登れば、やがて小奇麗な一軒の農家へ出たが、此家は大ゲイサーの南四丁に足らぬ處にあつた。

最早黄昏時になつたので、直ぐ大小二つの天幕の中小さい方を借らせた。……………馬は野原に放して置いて農家と大ゲイサーとの間を隔

てる膿んだ地面を一步一步氣をつけて横ぎつた。大ゲイサーの立派な形の圓錐は島(沼澤地の真中にゲイサーのある稍固い地面の意味)の東北側にあつて、小山の下から半ば離れてゐる或る時は注意深く蜂の巢の如くあいた孔から青い煮えかへる湯が低い他の孔へ縁を傳ふて流れる處を廻はり、或る時は烈しく沸騰するが表面には達せぬ漏斗の縁を過ぎなごした。周邊からは湯氣の雲煙が立ち上り、ごの口からも水蒸汽が出で、又た時々小さい湯柱を噴き、青泥の痴ぶたがぶく／＼煮えてゐたので、其の近傍で忽ち踝節まで熱泥に踏ん込んだ、烈しく狂ふ「ストロクル」を通り過して奇妙に其の間に夾まつてる草原があるのを横ぎつて、行儀よく出來てる圓錐に登つて大ゲイサーの池の邊に立つた。湯は池縁までなみ／＼と満ち、其の中央は沸々と煮え、又た幾度となく地鳴りを起し、其の直

接の杵構を通じてのみならず、周囲の地盤までも震はせて今にも噴騰せんと豫告してゐた。

夜が荒模様なので、ゲイサー池から四十碼足らずの草原の上に天幕を張り、深い溝を掘りまわりして中に枯草を堆く積み重ねて、何事があつても大丈夫に用意した。私は自白するが

こんなゲイサーに接近して居處を定めるのは天運にまかせ過ぎると私も考へなかつたのではない。

若し強い北風が起れば怪俄はなくとも噴騰の時に蒸汽浴をあびることはたしかであつた。が前にも

天幕を張つた跡があり且つ農夫が過去幾世紀に互つてゲイサーの行儀よくて間違つた例がないといつた。そこで牛乳、バターミガン（松鷄）黒



騰噴のルケーロトス

く如の體躬 にも尾し頭はツヤシの私ばれ見
たち落へ縁くな體生てがやてつ上舞に中空
ドンラスイア スブルナフ

パンで夕食を濟ませ、夜具をのべて、最後の衣服の火をつけてミシュレーの婦人常春論と見た農夫の妻の瘦せ枯れた姿と如何に妥協させらるかなど、考へ始めた時に地下の鳴動と共に大地が振えだした。ソラと飛び出て湯氣の渦巻く中をくさり湯

玉のしたゝるを聞きつゝ池縁の風上へ漸く廻つた時狂暴な努力一番でゲイサーは煮え返へる腹綿を太い柱の形で六十尺ばかり高く吐き出し、頂で放射して湯沫蒸汽の花毯を八方に飛散した。明瞭に疲れ果てゝ導管中に没しつゝゲイサーが私に例に倣ひ明くる日の氣

力を養へど雄辨に勸告して呉れた様に見えた。

九月九日ゲイサーにて——朝方に一二度の偽りの警報があつた。我々の友人(ゲイサー)は心中大に惱み、一二度深い吐息をついたが、未だ常態に復せずして、尙ほ胸の上にのしかつた永久の夢魔に譬へつべき壓迫を振り飛ばすだけの勢力が出来てゐなかつた。

四時頃「ストロクル」は出づる日を迎へんど、強い永い而かも斷絶した噴騰を起し、三十七分間續く一種の祝ひ火と見えた。少くも私の想像では此の方がゲイサーより遙かに裝飾的の噴泉で、……圓錐も池もなく平地から直ぐ湧き出て、高くも上らぬが、其のシャワーがもつと奇麗に分れて完全な飛沫と湯氣の樹冠を成すのである。

大ゲイサーの激しい噴騰は二三十時間を隔てゝ一度づゝ起るが、ストロクルの方は有り難いことには何時でも泥炭を衣服遣りさへすれば直ぐ手應へがあるから、私は鐵砲で鶴二三匹を近い澤で撃ち、ハウカダールの寺ある村までいつ

て……方丈から羊胸を買受け、案内も頼み地方の歴史やゲイサーの遣り方を聞く積りで、早い午餐に招待して置いて急いで歸つて準備にかゝつた。案内者に農夫から玉蜀黍焼酎と咖啡を買いに遣り、自分は地方固有の自然調理法を利用せんとストロクルの口に澤山泥炭を積んで取つて置き、フランネルのシャツを出して、其の胴に羊胸、兩袖に松鷲一匹づゝ詰めた。客が來かゝつたから泥炭の分量を四十分間で利く位に配劑して料理の入つたシャツを直ぐ之にブチ掛けて置いた。

案内者に咖啡をゲイサー池で溫めさせ、草を茵に焼酎と細截りの乾鱈で北國流の副食を先づ出した。……四十分過つて、御馳走のごつしりした方がどうなるか神經過敏になつて、ストロクルに私の羊肉を喰はれては大變と今一服の吐劑をかけるつもりで又た泥炭を積み重ねさせた。然し七分間で心配はなくなり晝餐のベルが鳴つて一大噴出が起つた。私は湯氣と泥炭の切れと包まれながら、見れば私のシャツは頭も

尾もない胴體の如く兩腕を張り空中に舞上つてやがて生體なく縁へ墜ちた。然かし未だ晝餐に取り掛る譯に往かぬ。あまりパイプを詰め過ぎたので毎時もよりも意地悪く噴出を續け御馳走を取りに行けば燒傷するのであつた。十五分してやつと少し静まつてシャツを取返し、草の上に鹿瓜らしい顔した客の前に聞いたが、直ぐに客は杯を手にした男がストロクルの中へ落ち込んで何時もの如く投出され時にはずた／＼になつたといふ話をした。羊はうまく煮えてたが松鶏は羽に包まれてるから好からうと思たが、すつかり絲の如く潰ぶれてゐた。シャツの方は染色が褪色したのみで何んともなつてゐなかつた。

諸ゲイサーの古いものに關しては殆ど七世紀前に書いたノルエーの歴史に見える。然るに不思議にもアイスランドの記録に少しも書いてない。若し有つたらはアレ、フロードの如く其の傍で生れ又た死んだ綿密な歴史家が何等の注意もせなんだことは想像に苦む所で、恐らくはな

つたことは大ゲイサーの化學的構造が殆んど之を肯定しゐる。初めてアイスランドの記録に見えるのは第十七世紀中頃のもので、スカルホルトの僧都がゲイサーを此の家族といつてゐるが、それは形の完全なのを語ることが明かで、間違なく毎二十四時に噴出した。然るに其後百年して此の規則正しいのは止んで、オラフセン、ポエルセンは二十四時間に三四回の大噴出があつて、三百尺の高きに達することもあつたといふ。又た此の時には大ゲイサーの外に活動状態にある者はなかつたといつてゐるのも注意に値する。硅質の池と管との割合はあまり變つては居らぬ。池の平均直径は五十七尺、管の深さは七十二尺ある。一七八四年の廣く近傍を震撼した地震の時には大ゲイサーには著しい結果を起さなう。一七七二年、チントロイルは水柱の高さを九十二尺と見積り、八九年にスタンレーは最大の高さ九十六尺とした。此の人は舊トロクルが百三十尺の水柱を持つてゐて、隣の太いものと競争したといふ。此の遺跡はゲイサーの西四十

碼に幾つも空洞を成し沸騰泉を貯へたものとなつてゐる。然るに此の年の地震が其からくりを打壊して直に全く静まり、今其の硅質の足場から深く澄み渡つた青い湯を通して管の残りが窺はれる。ストロクルとは牛乳攪拌器といふ意味で其の沸騰を形容した語であつて、同年から此の名今の噴騰泉に移されて、此のストロクルが遙かに活動状態が盛んで、仲間で一等のやかましくなつた。實際地震が常に此の蒸汽と湯の通路に變化を起しつゝあつて之によつて開いたり塞がたりする。唯獨り大ゲイサーのみは供給される湯と熱とに従つて消長はあるが全く止らなんだ。一八〇四年には大ゲイサーは最も盛んで六時間毎に噴騰して、二百尺以上の高さに達し、側の舊ストロクルにも殆ど同じ高さで噴騰續繼時間も永かつた。

一八〇九年と一〇年にフリーカーとマッケンジーが見て前者は百尺後者は九十尺で三十時間毎に噴くといひ、又たストロクルは十時間か十二

時間置きに半時間づゝ噴いて六十尺も上つたといふ。

一八一五年ヘンダーソンが來た時にはゲイサーは再び變化し平均八十尺の高さで噴出の間隔が六時間置きであつたが一回だけ百五十尺のを見た。此の時はストロクルは平均二十四時間に一時間づゝ噴いた。

此時から後盛な噴出は三十時間に一回以上はなくなつて、高さも七八十尺で百尺を超えなんだし、其の間の小噴出が二回位あつて三十乃至五十尺に達して居た。

ストロクルの方は動作が非常に不規則で何時でも呼べば答へるといふ風になつてた。

以上がフタルブスの行く前の半世紀間の状況で、其後尙ほ幾度も變化して横山先生の見た様には、大ゲイサーは石鹼を多量に投ずれば噴騰するが常には出ず、ストロクルの方は何時でも噴かせ得たのである。